

毎年冬になると、東日本を中心に多くのハクチョウが越冬のために飛来します。オオハクチョウとコハクチョウは生まれてから1年くらいは灰色の羽色をしているため、モニタリングサイト 1000 では、成鳥と幼鳥を区別して個体数のカウントを行っています。

ハクチョウ類の成鳥と幼鳥

灰色の羽色は幼鳥が天敵に見つかりにくくするための保護色だと考えられます。日本に渡ってきた当初は灰色が濃いのですが、次第に白い部分が増えていきます。幼鳥は日本にいる間は両親と一緒に過ごし、繁殖地へ戻ると親子は別れて暮らすようになるようです。



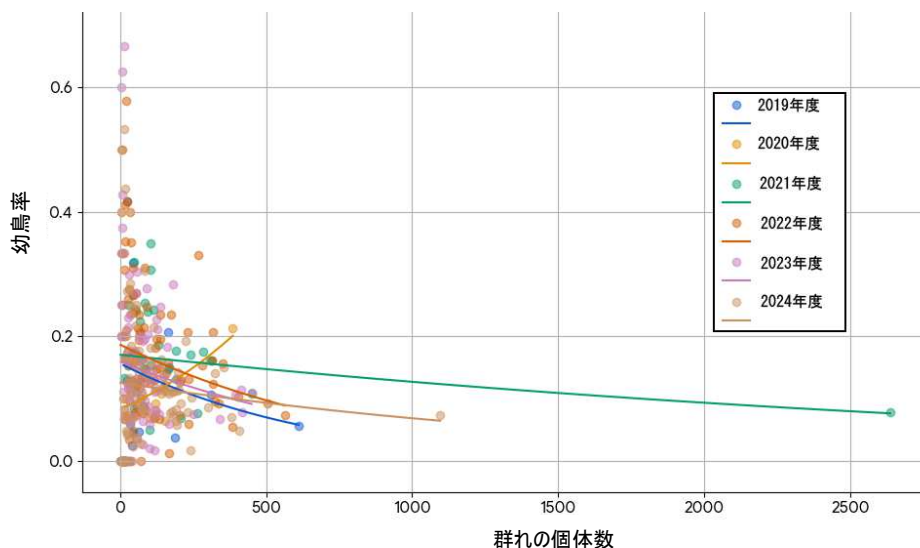
オオハクチョウの成鳥と幼鳥



コハクチョウの成鳥と幼鳥

小さな群れほど幼鳥が多い

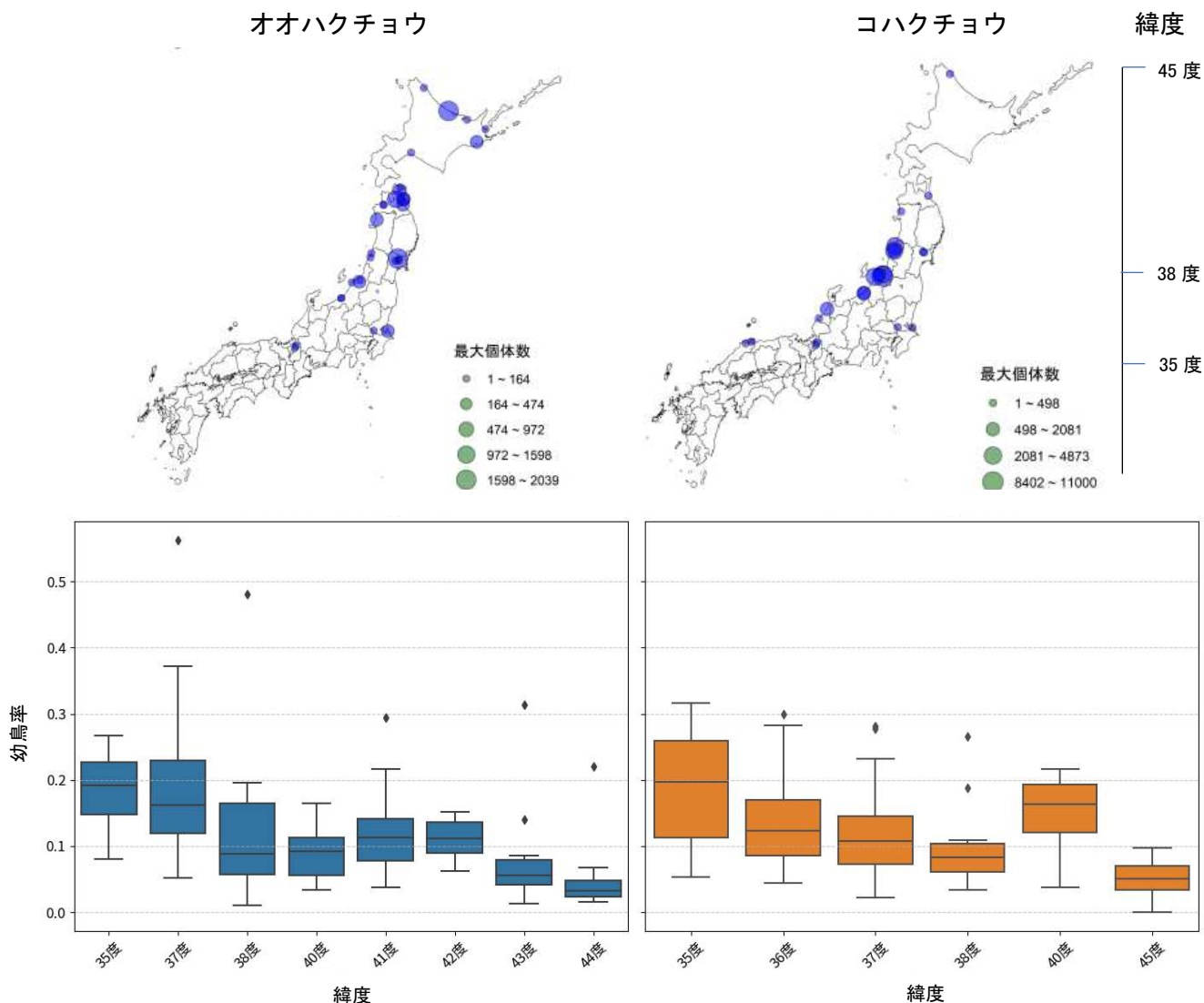
宮城県広域サイトでは、県内の約120か所で1月にハクチョウ類の調査をしています。このデータを使って群れの大きさと幼鳥率の関係を調べたところ、オオハクチョウ・コハクチョウともに、小さな群れほど幼鳥が多いことが分かりました。小さな群れが家族単位で構成されていれば群れの幼鳥率が高くなるのは必然ですが、群れが大きくなるにつれて幼鳥率が少しずつ減っています。幼鳥を連れた家族は、大きな群れを好まない傾向があるのかもしれませんが。



宮城県広域サイトのオオハクチョウの群れの個体数と幼鳥率の関係

南へ行くほど幼鳥が多い

次に全国のデータで幼鳥率を見てみると、南の地域ほど幼鳥率が高くなっていました。ハクチョウの親子は北国よりも温暖な南の地域を越冬地を選んでしているのかもしれません。



ハクチョウ類の越冬期の分布と幼鳥率(2024-05年)